

# 現代日本の住宅作品における建築家の植物認識

建築デザイン分野 堀野 彩

## Abstract

植物は様々な効果が期待されるため、建築にも近年多く使われるようになってきた。もとは1970年代に環境問題が浮上し、建設という破壊行為を償うかのように増えた建築緑化だが、近年のバリエーションの豊かさは植物に対する美意識の変化が感じられる。そこで、本研究では建築系雑誌で取り上げられた植物の特集や、実際の建築緑化の事例の分析から植物の認識を明らかにする。また、日本に影響を与えたと言えるコルビュジエの緑化も、その意図を分析した。その結果、1970年代は、建築は抽象を求める表現であり、植物は生みのリアルな存在として取り入れることが敬遠されていたが、現在ではむしろ植物の偶然性や変化に期待を寄せており、新しい建築のフェーズを開くものとして認識されていることが明らかになった。

## 1. 研究の背景と目的

屋上緑化が条例で義務づけられる社会情勢の中で、緑化対象外の小規模な住宅作品においても、建築と植物が融合した事例が近年多く見られる。しかし、抽象的な表現を求める建築において、時間と共に変化していく植物はその美学が異なるとして敬遠されてきた歴史ももつ。本研究では、設計に取り入れるのが困難である植物を建築家がどのように認識し、現在どのような意図のもとで建築に扱われているのかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 本研究の位置付け

建築緑化に関する研究としては、屋上庭園、屋上緑化を扱うものが多い。植物を計画的に植えるのか、偶然に任せるのか、また微地形によって自然と同様の状態をつくり出し、生物多様性を実現するのかという、植物をどこまで計画するかという視点は本研究と一致する。しかし対象に関しては、今回は建築と別で考えられがちな屋上庭園を省いた。代わりに建築との接地性が高いプランター併設の事例、屋上緑化、壁面緑化を対象とし、それらの事例から建築家の植物認識を明らかにする所に新規性がある。

## 3. 暮らしの中の植物

日本は美しい自然を有し、豊かな植物は私たちの生活に直接的にも間接的にも関わってきている。生活面から見れば、食用、薬用、建築、衣服など数えきれない程のものに植物を利用し、とても身近な存在であっ

た。「花」が奈良時代は梅を指していたのに対し、平安時代以降は桜に替わったように、民族の植物利用や愛好は時代によって必ずしも同じでなく、幾多の変遷があった。園芸が広く浸透したのは江戸時代であり、ここに日本独自の植物を飼い馴らす文化が発達する。

## 4. 植物偏愛の文化

盆栽や生け花、花見、紅葉狩りなど植物を愛でる行事や文学、芸術が発達してきたが、中でも盆栽は独特の世界観をもつ。盆栽は、草木を小さい器物に植栽し、適切な培養と矯姿を行って自然美を觀賞するものである。鉢植えは、草木を鉢に培養して、増やすことが目的となる点が盆栽と異なる。このように飼い馴らした盆栽は、書院造りの出文机の上で觀賞されていた記録が残っており、室内で楽しまれていたことがわかる。

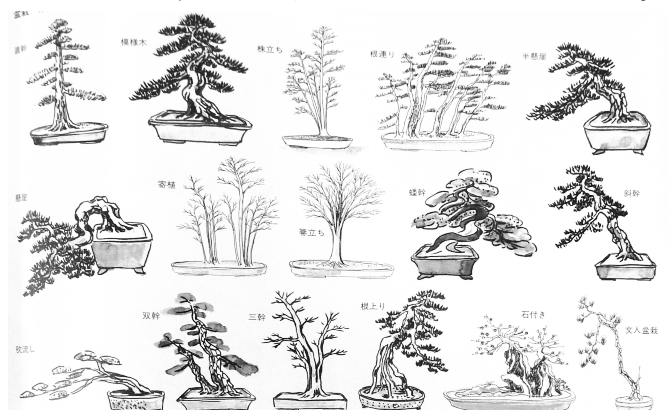


図1 樹形による盆栽の種類

温室も植物への偏愛の一つであるが、日本は江戸時代から“むろ”と呼ばれる植物専用の小さな部屋もしく

は容器が使われていた<sup>i</sup>。乾燥、寒さ、暑さから植物を守るための装置は、温室の先駆けといえるが、そこは植物専用の空間であり、人間の観賞用の温室が入ってきたのは、明治時代になってからである。西欧では、食事をしたり舞踏会をしたりと温室は楽しむ場所として使われていたが、日本では理科学習的な色彩の強い使われ方であり、植物主体の空間にとどまった。一方で、温室で栽培される熱帯植物は観葉植物として人気となり、一般に広まった。

## 5. 建築との融合

植物の利用は、芝棟という形で直接的に建築に利用された。これは、防寒のため屋根に土を載せ、その土が流れないように芝を生やしたのがはじまりと言われている。より強固な棟を作るために、日照りによる乾燥や寒冷に耐え、逞しい根張りでよく土を抱く性質を持つ植物が芝土に加えられた。このように芝棟は機能的な理由から選ばれた手法であるが、アヤメやユリなどは庭先から持ち寄せられたものが植えられており、装飾的要素が強い。特にキキョウは野生種ではなく大輪、多花、濃色の園芸品が多く使われている所から、他の棟仕舞には望めない華やかさを楽しむ一面があったことがわかる。また、芝棟は植えた後は人の手が入らないため、鳥や風が運んでくる種子が芽吹き、場合によっては大きな木が生えてきてしまうこともある。しかしこれを抜くと大きな穴があいてしまうこと、切ったら根が枯れた後雨漏りの原因となることから放置されることが多い。このように、芝棟は機能と美しさを備えて形成されるが、時に自然の力に圧倒されることもあり、それを許容するような寛容な建物であることがわかる。



図 2

## 6. コルビュジェの屋上庭園

建築の設計に植物を取り入れた事例として、コルビュジェの屋上庭園があげられる。モダニズムは自然と様式を排除してきたと藤森照信は述べている<sup>ii</sup>が、その時代の中で、コルビュジェは近代建築の五原則を表し、屋上庭園により自然を取り込もうとした。日本におけ

る影響力が大きかったと考えられる彼の作品は、植物の利用に関して大きく3つのパターンに分けられる。

### ■断熱材としての屋上緑化

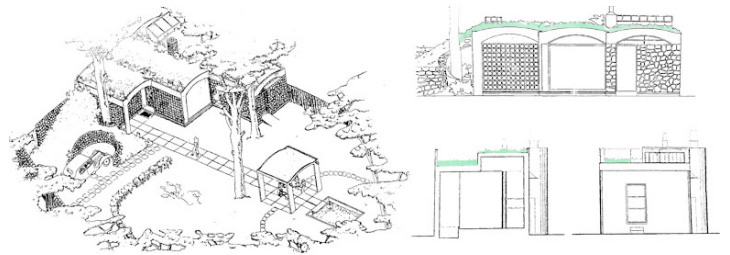


図 3 サン・クルーの住宅スケッチ、立面図/小さな家立面図

屋上全面を緑化したものは、両親のための小さな家(母の家) (1925) とサン・クルーの住宅 (1935)、ラトゥーレットの修道院 (1960) である。

修道院の屋根も、教会堂のそれも、うすい土の層で覆い放して、風や、小鳥や、その他種子運びの手段の偶然にまかして、防水と保温の役目を保証する。(ラトゥーレット修道院)

このように、植物は防水と保温の役目であると明言されているが、屋上全面緑化は徐々にやらなくなる。

### ■風景を切り取る生垣

ベイスティギ邸 (1931) は、以下のように述べている。

「パリはキズタやイチイの生垣で隠れてしまう。見えるのはパリの聖地のいくつかだけ。凱旋門、エッフェル塔、テュイルリーとノートルダム、サクレ・クール遠望。」

このように、パリの眺望を切り取るフレームとして、非常に建築的に植物が使われていることがわかる。

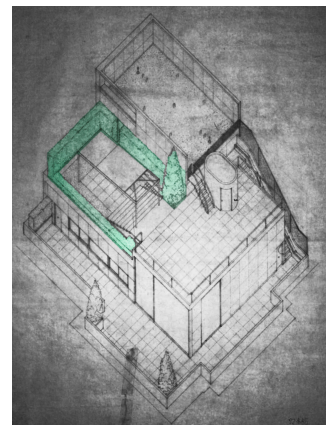


図 4 ベイスティギ邸

### ■ゾーニングとしての花壇

近代建築の五原則が適用された最初の作品が、クック邸 (1927) である。この形式はスタイン邸 (1928) を経てサヴォワ邸 (1931) で集大成となるが、すべて屋上階に備え付けのプランターが設けられている。

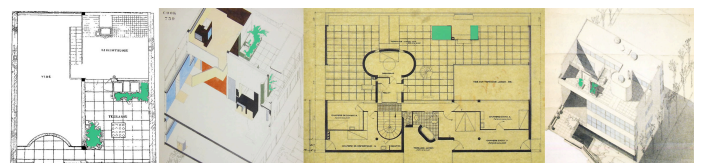


図 5 クック邸屋上階平面/アイソメ、スタイン邸屋上階平面/アイソメ

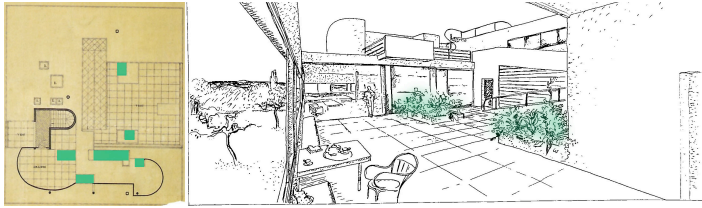


図 6 サヴォワ邸屋上階平面／パース

「草の中に立っていると、広がりは余り遠くまで見えない。それに住むためには草地は不健康で、湿気にあって等々だ。そこでこの家の庭は地上ではなく、地面から3m50上がった所に置く。それは空中庭園で、地盤は乾いて健康的で、この新しい地面からは、地上に居た時よりも遥かによく景色は見える」

「眺めがすばらしい。草も美しければ森もそうだ。なるべく触れないようにしよう。家は草の真中に品物のように置かれ、何もまぜかえさない。」(サヴォワ邸)

これらより、コルビュジエは屋上庭園という形で植物を建築に取り入れたが、眺望を重視するものもしくは断熱材としてのものだったことがわかる。そのため、植物は建築の外観を表すものではなく、むしろ建築美と相反するものとして隠されていた。

## 7.環境時代の緑

第二次世界大戦によって荒廃した国土に緑をよみがえらせるために、1950年から緑化運動がはじまった。1970年に入るとレジャー施設やゴルフ場、住宅地の開発による環境破壊が問題になりはじめ、開発を担う建築界においてもこの時期は緑化に関する特集が多く見られた。ここでは以下の特集を対象とし、建築界がどのように植物を認識していたのかを明らかにする。

A「住宅における自然と伝統への対応」『新建築』1973年2月

B「集住体と集緑体」『都市住宅』1973年3、5月号

C「都市の住環境1 緑」『建築』1975年5月

まず、当時の背景が伺えるB中の太田隆信の文より、建築側からの植物への誠実なアプローチは少なく、緑に関する記述は体系化されていなかったことがわかる。また、免罪符という的確な言葉によって、開発による伐採や、建設行為に対する罪の意識からの植樹が万延していたことが想像される。

いわでものことかもしれないが、外部空間に関して、特に緑に関して、私は最近とくに、憂慮している。それは、この問題があまりにもないがしろにされているからではなく、むしろ、あまりにもイメージに、緑があたかも免罪符であるかのように、都市に、建築に取り入れられて行きつつあるからだ。

緑がオールマイティであるかのように、誤解してはいけない。また、緑にインスタントはありえない。緑について語ることは、即、100年の計につながるのであり……「緑のスクラップブック」太田隆信

同じ特集内の西沢文隆の文章では、どのように緑を認識してどのように増やしていくべきかが書かれている。西沢は、緑の絶対量を少しでも増やすべきで、条件が悪い場所での緑化も「やらないよりやった方がまし」と表現している。しかし、「敬虔な気持ちに立還って自然とつき合う方法を慎重に配慮しなければならない」と語るように、緑が危機的状況になっているので、日本的な、植物を飼い馴らす態度は肯定できなくなっていることがわかる。また、公害に強い木を街路樹として選ぶことには「木に対し人間が生権与奪の権がある」という考えがひそんでいる。そのような態度では共存はむづかしいかも知れない」と語り、樹木の利用の姿勢にも警鐘を鳴らしている。西沢にとっての緑の効果は、景観の向上が大きな割合を占めており、街路樹について「公害に比較的強いものばかりでは変化に乏しく面白くない」としている点、また以下の引用からそれが明らかとなった。

…略…都市の並木や公園と同じ樹種の中から選ばれば都市景観として、ひとつに融け込み易い点で好ましいし、緑はしよぼしよぼしたものでなく旺盛に繁茂し易いものが望ましい。勢のない緑なら従って貧相であり無い方がよい。花も植えるなら豊かで美しいのがよい

Aは前述の西沢と篠原一男の対談である。篠原は自然は人間の外側に広がる大きなものと認識している。それが弱ってきている中で、例えば建築の中に取り込まれる少しの緑によってあたかも「自然を感じられる」と表現するのは価値のごまかしであると表現している。偽物の「自然」ならばないほうがましだという点で、西沢と立場が対極にある。また、植物の免罪符的な利用はここでも批判されており、「建築家が自然といったときにそれが安易なところで表現されてしまう」ことを嫌うと述べている。

建築美と植物美に関しても言及がある。篠原は植物を「生まましい」と表現しており、その具体性が内部空間の抽象性と合わせられないため、設計の主題に植物がのぼることはないと言っている。抽象性を追求する建築と、勝手に変化してしまう植物は相容れないものとして認識されていたことがわかる。

一方でCは、一般市民の建築緑化をフィールドワークによって紹介しており、趣味的な部分でどのような緑化がなされているのかが調査されている。住民が勝手にやっている緑化は魅力的な街並を自然と造り出しており、「緑化は人まかせではだめ」「お仕着せの緑がどのように展開していくか」「団地は住民の定住性が高いほど緑化される」などのコメントから、住宅において植物を扱う時の計画する側と住う側の齟齬に着目していることがわかる。

これほど緑に関する特集が組まれたのはこの時限りであり、この時代に植物観は大きく変化したと考えられる。

### 8.1960~2011の建築緑化の変遷

次に、『新建築』1960年~2011年の建築緑化された事例を取り上げ、植物はどのようにデザインに取り入れられたのかを見ていく。本研究では、建築と植物が直接関わっているもの、すなわち、屋根緑化、壁面緑化、内外を問わず建築と一体となったプランターボックスを併設するもの、植木鉢が室内に置かれたものを建築緑化と定義する。なお、ここでは人が出られる屋上庭園を省いた。これは、建築とは別世界として計画されやすく、建築との融合の度合いが低いと感じられるためである。一方で、室内に入り込んだ植木鉢はその移動可能性から建築とのくっつきが弱いと考えられるが、たくさん入り込んで空間に占める割合が大きい場合や、大きな植木で移動可能性が低いと考えられるものについては接地性が高いと判断し、事例として取り上げた。ビルディングタイプは住宅と集合住宅を対象とする。これは、建築物の規模が大きくなるほど、設計意図に制度や経済性、エネルギー対策といった合目的な意図が入り込むが、住宅のような小規模で使い手がはっきりしているものは建築家の思想が反映しやすいと考えられるためである。右表の154事例が抽出できた。

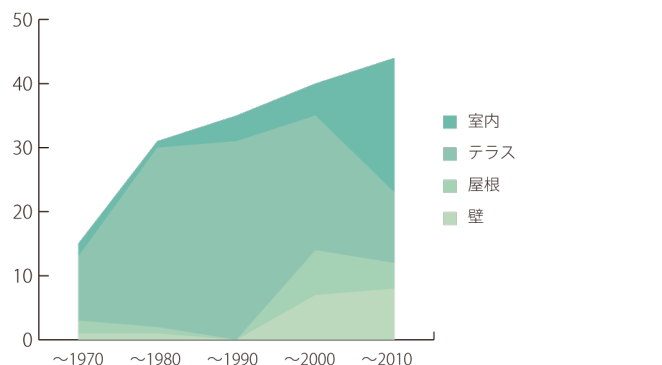
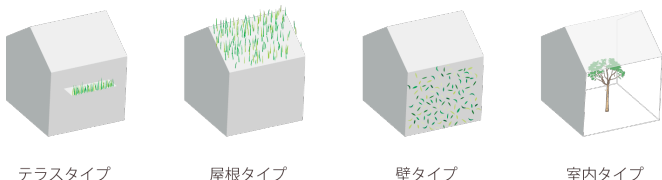


図7 植物の接地場所による分類とその事例数の変遷

接地場所の分類のグラフより、テラスやベランダなど家と外の境界部分にあるタイプが圧倒的に多く、特に7,80年代はそのタイプが支配していたと言える。室内に入り込むタイプは近年増え、接地場所は多様になっていることがわかる。

### 事例リスト

No.	作品名	竣工	No.	作品名	竣工
1	百人町自邸	1955 01	78	アトリエハウス	1991 03
2	村田邸	1961 01	79	レム・クールハウス様	1991 04
3	あるグストハウス	1963 12	80	目神山の家11	1991 05
4	Y氏邸	1964 01	81	テラス42	1991 05
5	白川邸	1964 03	82	THE TORTOISE HOUSE	1991 06
6	O氏邸	1964 09	83	目神山の家12	1991 07
7	M氏邸	1964 11	84	南千里の家	1991 09
8	旧軽井沢の山荘	1965 06	85	松庭舎	1991 12
9	S邸	1967 05	86	温室のあるコンプレックス	1992 06
10	青山台の家	1967 08	87	上馬の家	1992 08
11	久ヶ原の家	1968 01	88	関鉄々邸	1992 10
12	U氏邸	1968 12	89	オーガニックビルディング大阪	1993 03
13	土井邸	1970 01	90	西山の家1	1993 04
14	ピラ・セレーナ	1971 06	91	TH-1	1993 05
15	2家族のコートハウス	1972 04	92	フィルタードハウス	1993 06
16	園伊久磨邸	1973 03	93	実験集合住宅NEXT21	1993 09
17	高橋邸	1973 05	94	ガリレオ・エッセジャー・パツハの家	1993 09
18	富士見ヶ丘の家	1973 08	95	Les Cinq Sens	1993 11
19	コートハウス オン ザ トップ	1973 10	96	デンティストの家	1994 02
20	天と地の家	1974 07	97	早稲田南町コロボラス	1994 03
21	緑良の家	1974 07	98	麴之館	1994 12
22	千綿邸	1974 08	99	Y-DETAIL	1995 03
23	サロンのある家	1974 09	100	住居No.1共生住居	1995 03
24	ザカラハウス	1975 04	101	2/5HOUSE	1995 08
25	覚王山レックスマンション	1975 07	102	タンポポハウス-Grass House	1995 10
26	摩のある森	1975 09	103	南青山の家	1996 05
27	辻室の家	1976 02	104	J邸	1996 05
28	渡谷邸	1976 03	105	ニッパハウス	1997 02
29	桜の木のある家	1976 04	106	A LITTLE HOUSE	1997 12
30	茅ヶ崎の家	1976 08	107	賢島ミキハウス荘	1997 12
31	サンライフ野間アラスハウス	1977 04	108	一本松ハウス	1998 01
32	長田邸	1977 06	109	アイビー・ストラクチャーの家	1998 06
33	G&G	1977 11	110	断崖の家	1998 06
34	茨城県営水戸会神原団地	1977 11	111	断崖の家	1998 07
35	シルバーヒル	1978 01	112	アロマハウス	1999 06
36	今里(白金台)社宅	1978 08	113	アルミニオハウス	1999 09
37	目神山の家	1978 09	114	武蔵野の家<内><外>の間	1999 09
38	銅谷の家	1978 11	115	アイビー・ストラクチャー	2000 01
39	ドムス淀川	1979 03	116	テラス・ハウス	2002 03
40	純・正面のない家	1979 06	117	目神山の家17	2002 08
41	目神山の家4	1980 09	118	清水邸	2002 11
42	目神山の家5	1980 10	119	北向傾斜住宅	2003 08
43	目神山の家6	1980 12	120	久留和海岸の住宅	2003 12
44	戸外につながる家	1981 09	121	樹葉の家	2004 07
45	医王庵	1982 08	122	C-HOUSE	2004 12
46	三七川原の家	1983 01	123	角田歯科医院	2004 12
47	元麻布の家	1983 07	124	空の光の家	2005 02
48	P.P.H.(Pocket Park House)	1983 11	125	boxK	2005 03
49	音楽室のある家	1983 12	126	conservatory	2005 03
50	下馬の家	1985 03	127	Love house	2005 07
51	二滴	1985 07	128	目神山の家19	2005 11
52	プールのある家	1985 11	129	t-project	2006 00
53	ユーコート	1985 11	130	HOUSE A	2006 12
54	M-HOUSE	1986 03	131	目神山の家21	2007 04
55	賀茂川河畔の家	1986 07	132	IRON HOUSE	2007 10
56	福家スタジオ	1986 07	133	美術館のような家	2008 06
57	岩田邸	1986 08	134	野川	2008 08
58	久我山の家	1987 01	135	House before House	2008 11
59	大野邸ツインボックスハウス	1987 01	136	大倉山の集合住宅	2008 11
60	万樹庵	1987 04	137	ROOF HOUSE	2009 03
61	目神山の家9	1987 05	138	EARTH HOUSE	2009 04
62	吉祥寺の家	1987 05	139	谷万成の家	2009 07
63	祐天寺の家	1987 07	140	Holistic Light Box	2009 07
64	武田邸	1988 02	141	inside house & outside house	2009 08
65	目神山の家10	1988 05	142	H&B House	2009 11
66	INDEX-WALL	1988 06	143	アトリエ・ビスグドル	2009 11
67	墨田の家	1988 06	144	薬山の小屋	2010 03
68	NM邸	1988 08	145	タワーマチや	2010 04
69	沖繩の家(長嶺邸)	1988 10	146	森×haco	2010 04
70	鈴木邸	1989 07	147	広州科学城科学技術者集合住	2010 05
71	西沢邸	1989 10	148	ミンナノイエ	2010 08
72	TRON電脳住宅	1989 11	149	ガテナハウス	2010 11
73	HOUSE OF ARTFORM	1989 12	150	森のすみか	2010 11
74	LHOUSE	1990 04	151	祐天寺の家	2011 01
75	神田川沿いの家	1990 04	152	川口邸	2011 04
76	樹光陸離-杉原邸	1990 11	153	駒沢公園の家	2011 06
77	アーティストの家	1990 12	154	新宿の小さな家	2011 07

年代ごとの特徴は以下である。

①～1970年

テラス型プランターが多く、立体的なプランターの先駆け（図 8）が表れ、次の時代に増加した。

②～1980年

建築緑化の数が急増し、集合住宅の事例（図 9）もでてくる。立体的なプランターが展開されたり、プランターの形が工夫されたり（図 10）と、ファサードを意識したものが多い。

③～1990年

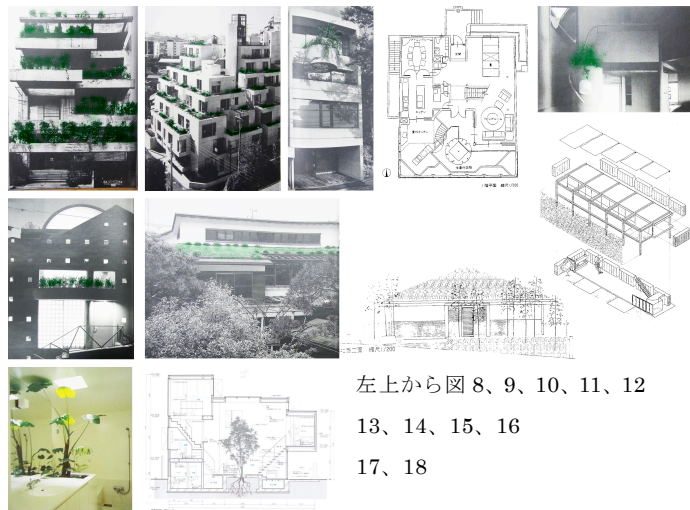
プランターは中庭に面するものや室内のものが増える。室内に hidroカルチャー方式の水耕栽培がコンピュータ管理で導入されたハイテク住宅も開発された（図 11）。

④～2000年

前半は、プランターに曲線が使われたり、シンボリックなデザインがされたり（図 12）、より装飾要素が高まる（図 13）。後半は、屋根緑化が続出し（図 14,15）、坂茂によるアイビーストラクチャー（図 16）や藤森照信による植物素材のような実験的試みが続く。

⑤～2011年

プランターが家具と一体化したり（図 17）、室内地植えタイプが増えたり（図 18）、温熱環境が植物主体の住宅であったり、植物と住宅の絡み方は多様化した。



左上から図 8、9、10、11、12  
13、14、15、16  
17、18

### 9. 建築家の言説より

90年代後半から植物の扱いが多様になったため、これらの事例のうち設計意図が数多く表明されているものに関して分析を行う。

まず、石上純也は、自身の設計に植物を多用することに関して、「植物は伸びたり枯れたりするので、不確定要素としてそれらを加えることによって、全体が変容を行う建物になるのではないか」と期待している。「自

分の設計だけで完結するような建物を作りたくない」

「建築というものは空っぽの箱としてそこにあるというよりは、ごちゃごちゃと使われていくことでよくなるものの方が魅力的だと思います。そういうことを許容できる建築でないと現代的ではない」と語っている。植物の予想のできない成長や偶然性をむしろ肯定的に見ており、そこに新しい建築の可能性を見出そうと、以下のようにも語っている。

「家具や道具や植物など、建築以外のいろいろな具体的な要素が入ってきても、どこまでも壊れないような抽象性を考えたいと思っていた。開かれた抽象性。」



図 19：t-project／石上純也

図 20,21：house before house／藤本壮介

次に、藤本壮介を見ていく。対象事例の house before house については、「2～2.5m という極小サイズの箱に木が植えられて、その樹木付きの箱が立体的に積み上がっている。この小さなスケールによって、これらの箱は建築であるというよりも、簡単によじ登ることができそうなランドスケープ的な存在となる。」と語っている。これは、木を植える箱の大きさに木自体の大きさが適応する性質を利用しており、コンセプトに「自然と人工物がまじる<sup>iii</sup>」と表現し、木に自然を見るという点でも非常に盆栽的な利用である。また、外観について「どこから外観が始まっているのか、はっきりとは言うことができない。」と表現しており、形のない建築について「これは単に形態の問題だけではなく、建築が機能的にも存在としても自律していないことを指している。完結していないこと。不完全性の持つ可能性。」と表現している。これらより、藤本壮介は植物を盆栽的に扱うけれど、そのスケールが本来の盆

裁より大きいため、人間主体になりきらず植物の影響を利用して設計している。よって、建物の未完結性を期待する所から使われていることがわかる。

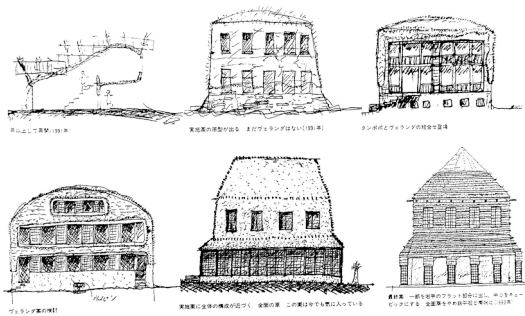


図 22：タンポポハウスのスケッチ／藤森照信

最後に藤森照信を見ていく。「両者（建築と自然）の幸せな関係は「寄生」である」「大自然に寄生する人工は美しいし、人工物に寄生する自然も同じように美しい」と述べているように、植物は建築の敵対物であるという認識からスタートしている。寄生する美しさの追求のために植物は使われ、それは直接的な美観にも通じる。「なんとなく建築であるような、ないような、どちらにも偏らない自然物と建築との接点」を出すために、毛深い表情が好まれ、ニラハウスに関しては「秋口になると、スーと伸びた茎の先に白い可憐な花をつけ、風なんか吹くとそれはもう、白いベールを被った棟が揺れているように見えなくもない」と表現している。

「植物とも建物とも見分けがつかない」というような見え方の馴染みについての言及と、その植物仕上げにおいて大勢の人（素人含む）が手をかけて造り上げたというセルフビルドの記述が多く見られた。これらより、藤森照信は建設行為に自分たちが参加することを好んでいることがわかる。また植物という手のかかるものを仕上げにすることで、竣工後も住人が建物に積極的に関わっていく状況をつくっている。選ぶ植物も、“親しみがあるからたんぽぽ”のように大衆性を意図している。その大衆性によって、愛される建物にするという所に、植物が建物の未完結性に関与していると考えられる。

以上より、それぞれ植物を利用するのは建物が建物自体で完結してしまわないようにという期待が込められており、植物の変化や偶然性を好んでいることがわかる。これらはモダニズムの時代に排除されたものであり、価値観の変化が見て取れる。また、彼らにとっての植物は、1970年代にタブー視された盆栽であり、非常にドライに植物を扱っていると考えられる。

## 10. 結論

日本人は、豊かな自然の中で西欧とは異なる植物観を持っていた。その美意識は芝棟という形で住宅にも取り入れられ、植物と良い関係を結んでいた。しかし、住宅が「建築」として敷居の高いものになると、空間の抽象性にそぐわないものという認識がされる。また都市開発によって緑が減少し、植物の入り込む物理的な隙は狭まっていく。その中で、建設行為の後ろめたさを隠すものとして緑が濫用され、「緑は善である」という漠然としたイメージが万延し、今に至るまで影響を及ぼしていると考えられる。植物の扱いに慎重にならざるを得ない時代が到来した。

そのような背景において、一部の建築家たちは植物に関する知識を増やし、理解を深めようと努力してきている。実践的な知識に留まらず、緑や自然といったものの認識においても議論が交わされてきた。そして近年、住宅に植物を取り入れた事例が増加している。一部の建築家の設計意図から、植物は建築の未完結性に関与するということがわかった。その植物は飼い馴らされた、非常に他者性が薄い存在ではあるが、やはり人間にとっては他者であり、世話がかかったり住宅に好ましくない状況になったりする。そのような他者をいかに設計に含むかということに、今後の新しい建築を期待できると考えられる。

## 参考文献

- 松田修『植物世相史—古代から近代まで—』社会思想社／1971
- 亙理俊次『芝棟—屋根の花園を訪れて—』八坂書房／1991
- 『世界大百科事典』平凡社／1972
- 石上純也『ちいさな図版のまとまりから建築について考えたこと』INAX 出版／2008
- 藤本壮介『建築が生まれるとき』王国社／2010
- 藤森照信『21世紀建築魂』INAX 出版／2009
- 伊東豊雄、藤本壮介他『20XXの建築原理へ』INAX 出版／2009
- 藤森照信『藤森照信建築写真』TOTO 出版／2007
- 瀧光夫「温室建築二題」『新建築』1980年10月号
- 富永譲『ル・コルビュジェ 建築の詩—12の住宅の空間構成』鹿島出版社／2003

i 平野恵『温室—ものと人間の文化史』（法政大学出版局 2010）  
 ii 20世紀建築は、歴史と自然の二つを捨て、代わりに、20世紀の科学技術と合致する思想と技術を駆使して建築を生み出すに到った。「藤森照信 21世紀建築魂」（INAX 出版 2009）  
 iii そのような総体を、この限られた敷地の中に実現することを考えていくうちに、この隙間だらけの山のような、樹が生い茂った集落のような、拡張された家の概念が生まれてきた。それは、内部と外部が、自然と人工物が、家と都市が入り混じるような場所である。

◆討議[ 嘉名 ]

なぜ、植物という言葉を使ったのですか？自然、緑化という言葉とは区別して使っているように感じますが、いまいちその意図が読み取れません。また、事例を見ていくと石井先生が目神山のものがたくさん出てきますが、これらはロケーションも重要な要素であって、建築単体ではなく敷地や周辺環境と一体的に捉えないといけないと思います。そのところはどうか考えていますか？

◆回答：

私が植物という言葉在意図的に使ったのは、人間とは別の存在であるということを強調したかったからです。緑化という言葉からはまちづくりが連想され、そこには人間の行為が含まれていると思います。一方で、自然は私たちの手中にあるものではなく、おおきなまとまりのイメージを持っています。建築に使われる植物は人間が飼い馴らしているけれど、それでも人間の他者であることを明確に表現できると思ったからです。

周辺環境に関しては、確かに影響があると思います。ただ、そのような周辺から受け身的に計画されたものよりは、積極的に、エゴイスティックに設計されたものに興味がありました。そのような事例においては、植物を取り入れる理由に免罪符的な感情が混じっていないのではないかと考えたためです。

◆討議[ 嘉名 ]

植物という言葉を使う気持ちはわかりますが、対象に緑化も混ざってしまっているのもっと削ぎ落とすことができたのではないかと感じました。

◆討議[ 吉田 ]

植物を取り込もうと思っている空間は、そもそもどのようなイメージを持っているから植物を取り込もうということになるのですか？その空間と植物の関係性は？

◆回答：

建物は人の居場所を守るものですが、多少の不便さのようなものがある方が居心地の良さを感じていると思っています。植物はコントロールできる部分はありますが、私たちの活動に関係なくふるまいます。そのような偶然性や変化していく性質が空間に求められているのだと考えられます。

◆討議[ 横山 ]

今回対象にした事例に対して、あなたはどうか評価していますか？また、その研究を通して、あなたが今後植物を取り込む建築を造るとしたらどのようなものを造りたいですか？

◆回答：

建築緑化に関しては、まだ発展途中という印象を持っています。近年はいろいろ工夫されたものが出てきていますが、大胆さは前の時代の方が勝っています。植物をおそろおそろ使っている感じがあるので、私が設計するとしたら建物が植物に圧倒されるようなものを造りたいです。芝棟やインドの建物は、植物が建物を壊すことがあります。それでも人が住んでいる限り成り立つ強さを持っていて、そのような所に魅力を感じます。

◆討議[ 倉方 ]

言いたいことを論理の力で導いて欲しかったです。特質を扱っているのに、統計の手法をとってしまったから内容が薄まってわかりにくくなっていると思いますが、この中で一押しするのはありますか？

◆回答：

石井修さんの初期の作品が好きです。目神山シリーズは地形に従い建物を隠すという手法に収束していくのですが、例えば1978年の目神山の家や剣谷の家は積極的な造形がされています。まるで建物が植物を魅せるために設計されたように見えるこれらの事例は、植物を立体的に取り込みつつその形状が内部にも反映されています。人間のための空間に付随する植物ではなく、植物スケールの空間が設計されてそれに内部空間が付随しているようなものが良いと思います。